

Mary A. Renda,

Taking Haiti: Military Occupation and the Culture of U.S. Imperialism, 1915-1940.

Chapel Hill and London: University of North Carolina Press, 2001, xvii+414pp.

す さと じゅん べい
壽 里 順 平

I

「ジェンダーおよびアメリカ文化関連叢書シリーズ」内の一冊として刊行されている本書は、ハイチ占領時代のアメリカ合衆国（以下「米国」）がハイチから受けた文化的影響に焦点を当てている。「占領」という特殊な形でハイチに接触した米国側が受けた影響を、人種やジェンダー論の専門家である著者が仔細にとりあげ考察している。著者は、この占領統治にかかわった人々の残した手記、伝聞、マスコミ報道など、これまで等閑視されてきた言説をもとに、影響過程の再構築を試みている。資料の引用が本書の大半を占めるが、この点についての受け止めかたは、ハイチへの関心から本書を読むのか、現代米国文化（社会）史の資料として主に米国側の関心から読むのかにより、大きく分かれる。

評者の経歴上の立場は前者にある。この書評における関心も、アングロアメリカ社会におけるラテンアメリカのイメージ形成過程にある。米国は高圧的な「父権主義」を前面にハイチ干渉を敢行したにもかかわらず、ハイチの影響力が米国側に逆流したという意外性が本書の読みどころとなっている。そこには、米国南部における奴隷制廃止の後遺や、その後の黒人住民の公民権運動、労働運動、大恐慌の余波などの社会情勢が微妙にからまりあう時代背景が

あった。その結果、軍事占領という、情報を遮断された状況下において、「私的」で「個別的」な接触到すぎなかったはずのハイチのイメージが、米国内で一種のアングラ的な浸透を経てふくらみ、予期せぬことに、占領の大義「父権主義」を修正していく要因のひとつとなった、と著者は考察している。

本書の位置づけは、米国におけるジェンダー論の一形態であって、ハイチ史ではない。それゆえ、使用文献の多くは米国、カナダの出版物であり、ハイチ人側の見解は皆無とあってよい。ハイチの著名な民俗学者ジャン・プリス＝マルス（Jean Price-Mars）が、米国内で紹介されるヴードゥの誤認識を正そうとする部分（第6章）がおそらくハイチ側からの、唯一の発言機会となっている。それに呼応して、本書におけるハイチの設定は、いまから70～80年前の「米国にもっとも近いアフリカ」になっている。この設定は、著者が研究対象をあくまで米国とし、さらに国内の人種やジェンダー問題の一分野として扱っていることを示している。

以上を踏まえて「ハイチを取る」という本書のタイトルに話題を移せば、長期の軍事占領と奴隷制度の復活というきわめて非人道的な軍事統治を容認するかのような誤解をあたえかねないことも承知のうえで、著者はあえて「取る」（taking）という用語を書名に選択したのではないかと考えることもできる。しかし、いくら著者が研究目的を米国内のジェンダー・人種論に求めたとしても、本書のように外国との接触で生じた変化を扱う場合、それを純粋に国内問題として扱うのが適切かどうかは論議を呼ぶであろう。とくに、米国が加害国となっている場合、被占領国にあたえた深い傷を遠い過去の出来事としてくぐること自体が帝国主義的である。そのせいか、著者の努力にもかかわらず、「取られた」ハイチ人側の政治的「本音」や「不満」については公平で十分な配慮がなされるとはいえない。また、本書の主題である、軍事占領下のハイチからもたらされた文化の定着と展開の系譜そのものは、それほど新しい話題ではない。たとえばすでに『カリブ海世界』（石塚道子編 世界思想社 1991年 164～165ページ）にも、米国内へのハイチ文化の伝播・発展系譜図が

紹介されている。しかし、原初のメディアとして埋もれていた海兵隊員の私的な記録を発掘して評価した点は本書最大の特色といえる。

書名に加えて副題にも触れておこう。世界史の上では、米国によるハイチ占領の実質的な終了は1934年とされている。だが、この年に海兵隊は撤退したが、占領統治にかかわる非軍事的な行政関係者は居残った。本書は、両国関係の正常化以降も米国による非軍事的・文化的な占領が続いたとの認識から、その下限を1940年としている。したがってこの副題も、ハイチ占領を政治的観点だけでなく、文化的な観点からも追求する著者の立場を示している。ただし、著者がハイチを、ニカラグア、プエルトリコなどの保護国ないし準保護国的地位と並列的に扱っているのは適切でないように思う。現代史上まれにみる長期の占領統治は、同時代になされたハイチ以外への干渉と比較しても、もっとも苛酷なものであった点がときどき無視されているのは残念である。

II

本書は7ページのプロローグのほか、第1章(36ページ)に続き、本編を以下のような構成で本旨を展開させている。

アクナレッジメント

プロローグ

第1章 序

第I部 占領

第2章 ハイチと海兵隊

第3章 父権主義(占領統治の理念)

第4章 倫理の崩壊

第II部 占領の余波

第5章 ハイチへの注目

第6章 記憶の再生と欲望

第7章 人種、革命、国家アイデンティティー

結語

以下、章を追って本書を紹介し、コメントを加えることとする。

まずプロローグの前のアクナレッジメントで著者

は、本書の執筆協力者にたいする謝辞と著者のクレオール語学習歴、ハイチ研究協会や地域研究者との接触など、ハイチ研究の経緯を明らかにしており、著者のハイチ専攻は比較的最近(1990年代)であることがわかる。

さて本書は、全米レベルの、広い社会層からハイチ占領のために集められた若者の私的な手記を収集している。彼らは、軍役を終えた後に、未知の土地での見聞をふくらませた夢物語の語り手となり、一般米国人のハイチ観を形成していく。プロローグでは著者の着目する2つの文芸作品が登場する。1917年にペンシルバニア州出身の海兵隊員フォースティン・ワーカス(Faustin Wirkus)の記録をもとに、ジャーナリストのウィリアム・シーブルック(William Seabrook)が書きあげた物語『ザ・マジック・アイランド』(*The Magic Island*. New York: Harcourt, Brace, 1929)、および『ゴネイヴ(ハイチの都市名ゴナイーヴの架空化綴りか—評者)の白人王』(Faustin Wirkus and Toney Dudley, *The White King of La Gonave*. Garden City, N.Y.: Garden City Publishing, 1931)の刊行である。本書では、この2作品を米国における大衆レベルでの「ハイチ熱」の発端として、第6章で10ページのスペースを割いて論じている。後者は軍国日本で多くの少年たちに愛読された漫画家島田啓三の『冒険ダン吉』に酷似している。『冒険ダン吉』は、南洋の島で無知な「土人」を「善導」して酋長になる少年の物語である。日本における「南洋」というあいまいな地理空間がハイチに入れ替わっただけであるが、「父権的」な米国市民はこうした立場に組みしやすいのか、この2作品をきっかけに元海兵隊員らが次々と同次元の空想的な“使徒伝説”を世に出していく。また、コロンビア大学文学部教授のカール・ヴァン・ドーレン(Carl Van Doren)は、上記『ザ・マジック・アイランド』を、「アメリカ帝国の文学における意義深い作品」(p.6)と評価しているが、この評価にたいして著者は「帝国がたんに銃と物語を求めるばかりでなく、帝国の構築にとってより密接な関係が両者(銃と物語—評者)のあいだにある」(p.9)と、論旨をくくる。

続いて第1章では、米国のハイチ占領に際して、他地域とは異なり、非民主主義的で時代錯誤な統治手段を講じた点を指摘している。海兵隊の侵攻目的は、第1に「カコ」(Cacos)と呼ばれる農民の武装ゲリラの掃討にあった。米国の傀儡政府の大統領となるハイチ人シュードル・ダルティグナーヴ (Philippe Sudre Dartiguenave) を擁立するには、カコと共闘する反米派の対立候補のロサルヴォ・ボボ (Rosalvo Bobo) 医師を排除する必要があるため、彼らの集結地となる北部港湾都市のカブ・アイティアン近海に艦船を停泊させて首都ポルトープランスの状況を見守っていた。1915年7月28日時点での全米各地から集められた米国海兵隊総数は2万8330名 (p. 81) で、その影響力の大きさが推量される。

第1章の小項目になっている「米国のハイチ干渉と占領の簡潔な読み物」では、奴隷制度が過去のものとなった米国が、黒人奴隷制度を世界で最初に廃止して黒人による独立国を建設したハイチを占領し、擬似的奴隷制度を復活させたことが紹介されている。だが、この歴史的な経緯は、米国社会ですら常識化しているとはいえないので、この小項目は本書の最初におかれるべきであったと思う。この箇所には、通常は見過ごされがちな歴史的事実、たとえば米国南部が奴隷制度廃止を渋っていたとき、南部の黒人たちが相当数ハイチに移住したことなども説明されている。この事実、結果として移民が定住地に居着かなかつたために見過ごされがちだが、本書がこの移住を米国のハイチに対するファースト・コンタクトだったと位置づけている点に評者は新鮮さを感じた。

第I部の「占領」では、19年間のハイチ占領による文化的な影響を概説している。海兵隊員はハイチにたいする予備知識も関心もない特殊な立場にあった。またハイチ全土に軍事管制が、本国には報道管制が敷かれた。米国政府はカコ潰滅を至上命令にしたものの、一般農民、ゲリラ、ゲリラ支持者の区別ができないまま、逃亡する一般農民を無差別に殺戮した。誤射や不必要な暴行、扼殺の多くは軍事司法手続きを経ずに無罪となった。これらの状況はすべての面において異常である。

カコの最高指導者で元国軍将校シャルルマーニュ・ペラルト (Charlemagne Peralte) は、占領軍の主導により組織されたハイチ憲兵隊の兵舎を2年間襲撃し続けたが、2名の海兵隊員が彼を捕らえ殺害するまでには占領から3年もかかった。この予測外の手間取りには、「(大統領の一評者) ウィルソンもブライアンもハイチに関してはたいした知識がなかった」(p. 97) というように、カコやヴードゥにたいする米国側の基本的な無知・無関心がある。ヴードゥを特定の社会階級(下層農民)の信仰とみなしたり、カコとヴードゥの両者を無差別攻撃の目標とした結果、(米軍の公的記録によれば)犠牲者数は1万1500人にも達し、しかもその大多数がゲリラと無関係な一般農民だった。こうして「父権主義」が、無知のうえに築かれた自己過信であることが露呈するにつれて、報道管制がくずされ、この大量殺戮も米国内で大きく報道されはじめた。ハイチで何が起きているのかを知らせたのは新聞報道である。それに国内の黒人擁護団体が反応し、400万人の労働者ストや1919年に制定された婦人参政権にも影響をあたえた。

ハイチ占領統治における異常さは準奴隷制度の導入にある。ハイチ自体が非近代的だとして廃止した「コルヴェ」(Corvée) という強制労働制度を復活させ、若者を占領軍主導の道路建設に徴用する一方で、海兵隊員とハイチ憲兵隊員とで、服従しない同年代のハイチ青年を縛り殴打するなど、米国内であれば常識外とされる行動が許された。教練中に読まされた「伝道師」という劇画によって、彼らはハイチ人の上に立って「教化」する「父権主義」を植え付けられたのだと著者はいう。

III

3万人近い白人系の若者からなる海兵隊員が残した記録から見えてくるのはハイチにおける米国人像ではなく、無邪気な若者の夢想的なハイチ観である。これが第3章の「父権主義」や第4章の「倫理の崩壊」においても議論の主軸をなしている。評者にとってもっとも気がかりな点は、軍の管制下で行動

した海兵隊員から、除隊後に任地における自身の行動や当時の精神状態が異常であったという反省、社会に向けての発信が少なかったことである。いくら記録が「埋もれ」ていたとはいえ、海兵隊員による倫理的自覚がなかったとすれば、それらが米国内のジェンダーや人種問題の展開に直接かかわった貴重な根拠とするには無理がある。父権主義高揚の主役にはなりえたが、海兵隊員の記録は社会的変化の主役とはなりえないのではないか。

第3章の「父権主義」に関していえば、米国が行った干渉の政治的・経済的背景は、ハイチに限らず、キューバ、プエルトリコ、パナマ、ニカラグアなどにも共通している。基本的には欧米列強の西半球からの排除（モンロー主義）と後進地域への文明化がヘゲモニー強化の口実となっている。上述のハイチ以外の国々にも父権主義が貫かれているのは当然だが、著者はハイチ占領政策にすぐれてこの傾向が濃厚だったとする。ただ、1912年のニカラグア侵攻と占領は「父権主義」でなくて、15年のハイチがそうだと主張するには、米国のハイチにたいする扱いがニカラグアと異なるものだった点を指摘しなければならない。

この点を説明するために著者は、歴代大統領の指針の違いを比較し、彼の道義尊重の信念を「父権主義」の名のもとに特質化している。ここで、社会問題と直接は関係のない外交政策上の位置づけを、どのようにしてハイチ占領の後遺として現われるセックス、ジェンダー、マチスモをモチーフにした文芸作品におけるハイチのプレゼンスへと結びつけるかが問題となってくる。ここで「海兵隊」記録の間接的影響が説得力を発揮する。しかし、米国内での社会運動の流れを変える主要因は、海兵隊の私的な記録から生まれた大衆文芸活動というよりは、その後

ハイチへ実地検証にでかけた様々な調査団の報告にあったとするのが妥当であり、調査団は文芸作品の影響を受けずとも、一連の客観性と自立的判断にたいする責任感を維持したはずである。

第Ⅱ部「占領の余波」については総括的な所感を述べることにする。

ハイチ占領が米国内の社会に及ぼした影響を、海兵隊の私信、個人的記録、面接といった資料収集を通して論及している。本書は占領による有害さのみを強調する従来の帰結に対抗して、非日常的な軍事占領のもつ貴重さをも再認識させようとしている。しかし、従来の論議と著者の論議との比較の前に、次元の高低を離れて、海兵隊の置き土産であるハイチをめぐる一般的なイメージがどんなものだったかを再度振り返ってみたいほうがよい。たとえば米国の人類学者シドニー・ミンツ（Sidney Mintz）は『アフリカン・アメリカン文化の誕生——カリブ海域黒人の生きるための闘い——』（岩波書店 2000年）のなかで米国の占領による影響について「（占領は一評者）ハイチ人を未開で野蛮な、病んだ小農民として外国に伝える傾向を拡大し、でたらめなハイチ像がハリウッド映画や大衆的なメディアで広められていくことになる」（同書252ページ）といっている。本書においても、本稿の冒頭で述べたジャン・プリスマルスによる米国内で形成された虚像のハイチにたいする訂正について、大衆文化に求められるレベルとしては不必要な学術的描写だとする米国の社会学者の見解を引用することで著者は押し切ってしまう（p. 251）。これでは虚像と実像は対峙する場が永久になくなり、虚像である大衆文化のはたした「正」の側面だけをクローズアップしたのが本書なのかという印象をぬぐいきれない。

（早稲田大学法学部教授）